

## Arist-cl. 原物質情報

*Aristolochia clematitis*

アリストロキア・クレマティティス



草丈 50cm～90cm。  
長い根茎を持ちます。  
茎は直立するか、巻きつく。  
葉は心臓の形。  
開花期は、初夏から秋の中旬まで。  
花は 3cm、明るい黄色。  
原産地はヨーロッパ地中海原地方ですが、  
イギリスや北米のいくつかの地域にも広がりました。

古代エジプト人は潰瘍、化膿、発熱、ヘビの咬傷など、万能薬として使っており、ヒポクラテスも使っていた古い薬草の 1 つ。古代エジプトでは、《アンチスネーク》という意味を持つ名前と呼ばれていました。

属名はギリシャ語の *aristos* が最高を意味し、*locheia* が出産または出産を意味することに由来します。英語名の《birthwort》も同様に、植物が誕生の助けとして使用されていることを示しています。流産を引き起こすためや、止まってしまった月経を起こすことにも使われていたようです。

この植物の特徴は、受粉の仕方にあります。  
腐った魚のおいを放ちハエなどの虫をおびき寄せます。  
花の入り口は、誘い込むような色になっており、構造も入りやすくなっています。  
勾配のきついつるつるした傾斜で、あっという間に入るようになっている場合もあります。  
しかし、いったん入ってしまうと、脱出はほとんど不可能。  
花の内側に生えている先端が下向きになっている硬い毛によって逃げ出せないようになっています。閉じ込められた虫は、逃げようとして壁を羽でたたきます。  
このようにして、虫が、転げまわることで、おしべに花粉をつけさせます。  
受粉が終わるころ、硬い毛は衰えるので、虫は脱出することができます。

毒性：多量投与による中毒では、吐き気、嘔吐、腹部の有痛性痙攣、重度の腎不全。

少量摂取の慢性中毒では、腫瘍。

薬用：乾燥した根茎、または花がついた生の生薬を、発汗、通経薬、陣痛促進薬、興奮剤として用いてきました。

ヨーロッパ各地で民間療法として、リウマチ、痛風、胆石症に使われてきました。

最近では、傷薬としての有効性は分かっているのですが、発がん性、腎障害を起こすので、医療目的での、特に妊婦は禁忌とされています。